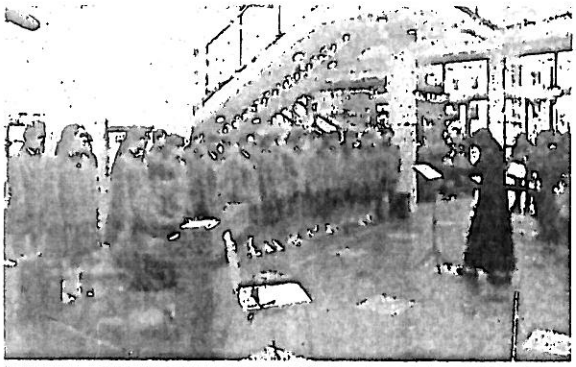
楽都・仙台に音楽ホールを

「復興の象徴」2000席規模

市が検討

「楽都・仙台に大型音楽ホール建設を」という市民団体や経済団体の声を受け、仙台市は音楽ホールの整備を検討している。東日本大震災からの復興の象徴になることに加え、交流人口の拡大につながると期待されている。ただ、最大300億円を超える巨額の建設費や場所の選定などの課題も多い。



音楽ホール建設を訴えて、仙台市青葉区のアエルで開かれた街なかコンサート（2015年10月）＝市民会議提供

巨額建設費など課題も

「音楽の力で心の復興をなしとげるには音楽ホールが必要だ」。県吹奏楽連盟会長の三塚尚可（なおよし）さん(76)は強調する。

三塚さんは、県合唱連盟など音楽関連4団体でつくる「楽都・仙台に復興祈念『2000席規模の音楽ホール』を！市民会議」の代表世話人を務める。昨年9月に同会議を設立して以降、「街なかコンサート」を3回開いたり、チラシ6万枚を配ったりして3000人を超える署名を集めた。同会議事務局長の渡辺兼光さん(65)は「重くて大きな数字。行政を動かす原動力になる」と語る。

三塚さんたちが「2000席規模」にこだわるのは、合唱や吹奏楽の全国大会を開催したり、国内外の一流音楽家を呼んだりできる目安となるからだ。

県内で最大規模の東京エレクトロンホール宮城（築52年）は1590席、仙台市民会館（築43年）は1310席で老朽化も進む。政令市で2000席規模の音楽ホールがないのは仙台市だけだ。ある市議は「震災から5年で復興にも一定のめどが立った。交流人口の拡大につながる音楽ホールは必要だ」と語る。

ただ、懸念は財政問題だ。市から委託された民間調査研究機関の報告書によると、建設費は最大で337億円、最低でも150億円かかると試算された。建設単価の高騰で、試算より2割程度高額になる可能性もある。

市は今年度、築50年を経過した市役所本庁舎の老朽化対応の検討も始める。立て替える場合、数百億円規模の建設費が見込まれ、奥山恵美子市長は先月の定例記者会見で、「二つとも大きな課題。いろいろなケースを試算し、市民に納得してもらえるよう精査したい」と、慎重な姿勢をみせた。

用地についても、仙台駅から徒歩圏内で、音楽ホールを建てられる地域は少ない。市議会から浮上しているのが、本庁舎の建て替えに合わせて音楽ホールを併設させる案だ。ただ、併設案も建設費を抑えられるメリットはあるが、音響など技術的な問題のほか、開館時間のずれ、動線の複雑さなどの問題も出てくる。

市地下鉄東西線の大町西公園駅に近い西公園（青葉区）や、錦町公園（同区）を推す声もあるが、公園に建設するには地元住民の理解が欠かせない。

市は今年度、課題を検証した後、ホールを建設するかどうか判断する方針だ。

建設計画 以前にも

音楽ホールの建設は、仙台フィルハーモニー管弦楽団が活動し、「楽都」と呼ばれる仙台市の悲願だ。建設計画は以前もあった。市は1996年、1800席規模のクラシック専用ホールを、現在の市立病院の敷地に建てる計画をまとめたが、財政悪化で凍結した。

音楽ホールの整備推進を公約に掲げ、2009年に初当選した奥山恵美子市長は11年1月、市の基本計画に検討することを盛り込んだが、震災で中断した。

仙台経済同友会など経済4団体は14年7月、音楽ホール建設基金を創設。3年間で10億円集める計画で、これまでに1億2000万円弱が集まった。市は今年度も昨年度に続き、2000万円の予算を組み、先行事例などを調査している。